
九死に一生 生還した新聞記者

(由井りょう子ほか・著、石巻赤十字病院の100日間、東京、小学館、2011、p.85-98)
2012年12月7日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

これは東北大地震の際に発生した津波に巻き込まれた石巻日日新聞の新聞記者、熊谷利勝(33歳)が実際に体験した、被災の情景を臨場感のある描写で書かれた短編である。

3月11日、熊谷は石巻市の西に隣接する東松山市の市議会事務局で取材をしていた。突然、震度6強の激しく長い揺れが起き、町の被災状況を取材、撮影するために外に出た。車のラジオをつけると津波の情報を告げており、道路には亀裂、段差などの地震被害がみられ、停電のために信号が止まり、渋滞が始まっていた。熊谷は津波の写真をギリギリのところで撮りたいという思いで、定川大橋に向かった。車内ラジオで(津波は50センチを観測)という報道を聞き、大したことはなく、シャッターチャンスはないかもしれないと考えていた。端の前は通行止めで進めず、橋の上では女性が「早く早く」と、誰かに叫んでおり、自分に向かって助けを求めているのだと考えた。それからすぐにすさまじい音とともに、橋に向かって雑木林と堤防を乗り越えて水が流れこんできた。ここで先ほどの女性の「早く」は「逃げろ」の意味だと気づいた。

熊谷は海を背にして逃げ、途中のフェンスによじのぼったが、水は勢いを増し、腰までつかった。もうだめだと思った時、プラスチックの箱につかまることができ、浮き輪代わりにできたが、直後に箱から手を離してしまい、溺れる。口に水が入り、「死ぬ」と一瞬頭をよぎったが、運よく浮上できた。今度は必至で比較的大きい船によじ登った。

いくらか落ち着いて周囲をみると、雪が降りしきる中、車やプレハブ小屋などが漂っていた。水が引いたら帰れるんだから、と自分に言い聞かせて、激しい寒さに耐えていた。今日中に救出されることはないだろうと思い、体力の消耗を避けるために、体育座りで膝を抱え込んだ。衣服はびしょぬれで、ただただ寒く、手足が動かなくなっていた。「助けて」と繰り返し叫ぶ女性の声がした。ライトをつけたヘリが上空を飛んでいた。手を振ってみたが気づいてもらえなかった。(海水を飲んだせいか、口中気持ち悪い。唇を舐めると泥が口に入ってきた。全身が油臭くてたまらない。意識が薄れ、目が覚める。眠って死ぬならいいやと目を閉じる。その繰り返しで、夜が明けた。上空にはヘリが飛んでおり、懸命に最後の力を振り絞って手を振ると、一度遠ざかったヘリが回旋して真上に来て、救助された。

担架に乗せられ、外来ロビーに運ばれた。トリアージは黄色だった。ロビーは所狭しとベッドが置かれ、人が横たわっていた。診察を受けると、津波の水と一緒に重油を含んだ水を飲んでいるために、体内に毒素が入っているため、入院の必要があると説明された。担架に乗せられると、エレベーターが停止しているため、人力で5階の病棟に運ばれた。夕食は缶詰のお粥とおでんなどがでた。家族や会社が無事を知らせたいと思ったが、固定電話も携帯電話も不通のために断られた。翌日の朝食、昼食はいずれも缶詰であった。午後になって院内では、テレビも見られるようになり、被災後初めて見たテレビで巨大地震であることを知った。

九死に一生という言葉があるが、今の自分がそうなのだなと思った。

熊谷の会社、石巻日日新聞社は津波の被害は少なかったが、停電で機械は停止していた。会社に残っていた社長、報道部長、営業部長の三人は決断した。「ここまでやられたら、われわれだってやるしかない。」「明日からも新聞を出そう。」がれきとヘドロの町に出て、取材して、新聞用のロール紙を切り取った大きな紙に、手書きで記事を書き、社員みんなで書き写した。六枚の壁新聞になり、石巻市内五か所の避難所と一か所のコンビニに掲示した。地震発生の翌日から六日間にわたって発行され続けた。

この壁新聞は、アメリカのワシントン・ポスト紙により世界に報道され、ワシントンの報道博物館「ニュージウム」に永久保存されることになった。